

## V 4月18日（水）放送の番組②の問題点

本件番組②は、1月22日放送の番組①で行なった不適切な表現等3点について、訂正とお詫びをする趣旨で制作されたものであるが、約6分間におよんだ番組全体が、従来の『朝ズバッ！』が行なってきた不二家に対する厳しい批判と打って変わって、不二家の広告と見紛うような不自然な構成と内容であった。

### 1. 訂正・お詫びの「主語」の曖昧さ

後段の訂正・お詫びのパートは、先に見たように局アナウンサーが進行し、3点の訂正箇所を事前収録のVTRで放送し、最後に「1月の一連の不二家報道で、行き過ぎた表現やコメントがあったことを併せてお詫びいたします」と締めくくっている。

『朝ズバッ！』は司会者みのもんたの名前を番組名に冠し、その独特のキャラクターに依存した番組であり、番組①の基調もその雰囲気を前面に打ち出していた。視聴者にじかに語りかけていたのも、むろん司会者であった。このような番組の場合、訂正やお詫びをする主体、あるいはその主語は誰ということになるのか。

3点の訂正内容は、A通報者の証言の編集方法とその表現や演出に関わるものであり、そのかぎりでは番組全体の責任において、あるいはTBSとして訂正とお詫びをすべき事柄であったと言えないこともないが、その3点においても、たとえばフリップを示して「チョコレートと牛乳を混ぜ合わせた」旨を強調したのは司会者である。視聴者はその断定的な口調や表情や仕草に込められた「怒り」を感じ取り、それを共有することを通じて、不二家という企業に対する見方や印象を形成したはずである。

しかし、番組②における司会者の発言には、訂正やお詫びに類する言葉がいっさいない。番組①における発言についてはもとより、のちの番組で不二家に対し、「廃業してもらいたい」「汚物だね」などと強い口調で語った点についても、撤回や訂正や謝罪を行っていない。そのかわりにあるのは、「スタジオのお菓子は全部不二家にしますから」という台詞に代表されるような、あえて言えば不二家への「擦り寄り」「恭順」である。

果たしてこれは、訂正・お詫びの方法としてふさわしいのかどうか。より重要なことは、この「豹変」とも受け取れる番組と司会者の姿勢が、次に述べるように訂正・お詫びの範囲を曖昧にしたことである。

### 2. 訂正・お詫びの「範囲」の曖昧さ

番組②が示した「擦り寄り」「恭順」の姿勢は、およそ6分間の番組全体に通底し、番組①がA通報者の体験的事実として伝えた証言すべてを否定し、撤回するような印象を与えている。

むろん後段の3点の訂正事項を注意深く見れば、またその後につづくVTRが「TBSは、法律家が証言者に面談するなどして調査した結果、やらせや捏造に類する疑いはないとの報告を受けている」旨を伝えていることを聞けば、A通報者の発言の根幹部分、すなわち「不二家平塚工場で賞味期限切れチョコレートが再利用されていた」との内部告発の核心については、訂正もお詫びもしていないことが理解できる。

しかし、それもまた、再び登場する局アナウンサーが「1月の一連の不二家報道において、行き過ぎた表現やコメントがあった」とお詫びするに至って、視聴者にとっては、いったい何が間違っていて、どこが正しかったと言いたいのが不分明になる。

委員会が番組制作関係者にヒアリングした結果によれば、訂正とお詫びは、番組全体の基調からすれば細部ではあるが、明白な誤りの部分である3点に関してのみ、とのことである。TBSも同番組関係者も「内部告発内容の根幹については撤回も訂正もしていない」と明言しているが、番組②からそのような明確なメッセージが伝わってくるとは言い難い。この訂正・お詫びの仕方は、番組としての『朝ズバッ！』の信頼性を、みずから損ねる結果になっている。

### 3. 訂正・お詫びまでの時日がかかりすぎている

番組①から番組②までのあいだには、およそ3ヵ月の間隔が開いている。この間、不二家が新経営陣のもとで再生に向かうなど、同社にも慌ただしい動きがあり、一般的な報道もつづいていたにせよ、デイリーで放送している番組が訂正・お詫びの放送をするまでに3ヵ月も要する、というのは時日がかかりすぎである。

しかも、訂正・お詫びをした3点を見ると、いずれも番組①の放送直後に不二家から受けた指摘・抗議から短時日のうちに、確認しようと思えばできた内容である。

委員会がヒアリングを行なった際、番組制作関係者は、消費期限切れチョコレートの再利用が行なわれていたという内部告発の「核心部分に間違いがないかどうかを再確認するのに時間がかかった」という趣旨のことを語っていたが、それはそれとしても、「視聴者に著しい誤解を与え」た事実の間違いについては迅速に訂正すべきであったし、その方法はいくらでもあったはずである。

こうした訂正がすみやかに行なわれていれば、番組①の直後から始まったTBSおよび同番組と不二家とのあいだの反目や相互不信の相当部分が解消し、その後の内部告発の核心部分の解明も進んで、視聴者や消費者の利益につながったはずである。訂正・お詫び放送の遅れが、その可能性の芽を摘んでしまったことは否めない。